

ストーブを圍みて

黒田 清輝
岩 村 透

「どうして英國では水繪が盛んで佛蘭西では振はないのでせう、振はないと云ふよりも寧ろやる人が少ないと云つた方が適當ですな」

「彼地では水繪と云ふと一概に馬鹿にして女小供の慰みか建築師の下圖に使ふもの位に心得て、眞面目に藝術家が力を注いでやる仕事ではないかの如く思つて居るのでせう。英國でも多少さう云ふ傾向は有ります、英國で水繪の盛んなのは一は女子供の普通教育にそれを用ひて居るせいではないでせうか。國民性と云ふよりも教育から出た習慣とでも云つた方が好いんです」

「兎に角何故英國では水繪が隆盛だかそれに就ては未だ徹底した議論は聞きませんね」

「音楽で云へば水繪はマンドリンでせう、本當のバイオリンはなか／＼六ヶしくて厄介ですがマンドリンは素人でも入り易い。一寸そんな風に水繪は簡単に取扱へて油繪の様に億劫にならないから素人でも學び易い。然し黒人すぢまでそれに釣られて素人に少し毛の生えた様なものをかいて満足して居る様では心許ない。水繪を眞に發達させようとなら女小供の慰みもの以上に引上げなければ駄目です」

「一體昔から水繪の大家と云ふのをあまり耳にしませんね。佛蘭西でドラクロアのを少し見ましたが素描にほんの淡彩を施した然しあれはデッサンの部類に屬しさうです。古い處で衣服の皺や人間の形體にざつと色を差したコ

ンポジシヨンの下繪の様なものはちよいと見受ました。今日の水繪はあれのポリクロームになつたものでせう」

「英國でもまあターナーなどを擧げる事は出来ませんが其他美術史に上る程の人を聞きません。水繪やパステル銅版石版木版の様なものには繪畫の本流でなくて支流扱ひにされて來たかの觀が有ります。小藝術としてですね。刀で云へば手裏劍と云つた格です」

「今日では廢刀になりましたから手裏劍の流行る時代になつて居るんでせう。日本在來の水で溶かしてかく邦畫はよほど材料が水繪のそれと類似して居ますから、將來の事を云ふのは可笑しいですが、他日水繪が大成される時期が來るとすれば、それは實に我が國でなければならぬと云ふのが理想に近いものだと思ひます」
「成程」

「水繪が手裏劍である以上は上段下段に構へる必要はないと思ひます、英國では随分上段下段に構へた油繪臭い面積の大きい水繪が眼につきますが御苦勞なこつてす」

「日本にも有るでせう、女小供の慰みものでない方法と云ふとすぐさうなりたがるのです。それに斯う云ふ事が有ります、彫刻家は色を持たないものだから始終色彩にあくがれて居ると聞きますが、それと同じに所謂水彩畫專門家なるものは淡白なものばかりかいて居るから堪らなく濃厚なものがかきたくなると云ふのです。三宅君なども餘程以前にはよくそんな事を云つて居ました」

「だから水繪の専門家なんて云ふのにはよほど趣味の瀟洒として一定した人でなければ六ヶしいんです。我慢がしきれなくなつて苦しまぎれに材料を濫用する様になります。自ら狭い窮屈な範圍に身を置いて、昔の武士

が一人の殿様に忠節を盡す様な考へで畫をかくのは損ではないでせうか。ものに應じて油繪水繪パステル銅版素描何でゝもやる様にしたいものです。あの奈良漬や淺漬と云ふ奴は鰻飯牛鍋などの後で食べると誠に瀟洒として美味なものです。がさうかと云つて漬物ばかりの御馳走も有り難くありません、水繪は味のいゝ漬物でせう」

「この材料の用途を誤ると云ふ事が一番詰りません、水繪を木造の家とすれば油繪は西洋館です。木造で煉瓦の眞似なんかするのは愚の骨頂です、材料を生かして使ふも殺して使ふも作家の頭腦の働き一つです」

「其處へゆくとウイツラーは實に精巧でしたね、彼の銅版や油繪は勿論面白いものには相違有りませんが、又水繪と來たら他の材料の取扱ひを許さない獨特の妙味があります。彼地で見た水繪の中では矢張ウイツラーでしょうか」

「ウイツラーはいゝです、全く彼の水繪を眺めて居るとよくも斯う甘くかけるものだと思ひ込んで仕舞ひます。實際水繪は一見容易な様で六ヶしいですからね、義太夫で云へは太功記十段目です、素人が習ひ初めに屹度手をつけず誰でもすぐ覺えて仕舞ふが、それで本當の味を出すのは黒人でもなく、至難のわざとされて有ります」

「入り易くして成り難いですかね。南畫も其點は似て居ます、文人畫式の一寸したものは誰にも眞似だけは出来るが眞隨を極めるのは難事です」

「妙な事をお尋ねしますが貴君は時と場合に據つては水繪をかいて見たいと思ひになる事は有りませんか。それから又展覽會などで水繪を見て成程水繪は面白い、あゝ云ふ場所をあゝ云ふ風にやれば愉快だらうなど、お考へになつた事は有りませんか」

「鉛筆に淡彩位のものはいいた事も有りますが油繪とは手法が逆に行くので例へば明るい處は一々塗残して行く
と云ふ風にそれが面倒で堪りません。展覽會で水繪を見ても日本はいゝ水繪をかく人が少ないのか感心しないで、
却つてあゝ云ふ處は油繪でやつたらもつと面白く行きさうだと思ふ様な場合の方が多うムいます」成程今日の日
本の水彩畫界には適評ですな」

「それになんたか水繪ではもの足りない氣がします」

「もの足りない」と云ふと材料が輕過ぎると仰しやるのですか。はゝ記者君今の一言は大切な處ですよ。^マ

「それから水繪は材料などの點から油繪でも無論さうですが、それ以上に材料の性質や表現の方法を充分に呑込
んでからかゝらねばならん、つまり手際の方が先き立つ様に思はれます」

「手際が先きへ立つ、ふゝん、面白い説ですな確かにそんな處があるかも知れません。ウイッスラーなどの畫にし
ても自然の面白味よりも先きへ手際の甘さに感心させられます」

「日本畫でもさうでせう、ぐつとのえら物がかいたのは別として一寸した人がかいたのでは手際のまづいのは見ら
れませんからね。先日も話したんですが文展の水繪が三枚より這入らなかつたのは一は手際が幼稚なのと、いゝ
加減の處で誤魔化した粗雑な深味も重味もない作が多かつた爲だと」

「一體深刻と云ふ様な事には水繪の材料は向きが悪るいんではないでせうか、日本畫もさう云ふ方面には得意ぢや
有りません」

「其ことに就いてもこの問語つたのです、深刻と云ふと若い人達は油繪の眞似をしたがるから困る、何にも油繪の

様に別にこてく塗らなくとも水繪の材料の許す範圍内で、油繪とは異つた味の深刻なあるものを現はす事は出來やうかと思ふのです」

「至極同感です、然し手際と云ふ事も看やうに據つては賤しい厭なことにもなります」

「さうです手際を手際だと思つて施せばもう駄目です、無意識の中に自然に應じて施した手際でなければ厭味です、此頃はこれは手際では有りませんと故意にまづくかく手際が流行つて居ります」

「逆手際とでも名づけますかね。先程文展の水繪が三點と仰つたのは入賞の數ですか。なに入選の數ですつて、えらい今年は酷いのですね殆ど水繪は存在の意義を認められないで消滅の形ですな。鑑査の標準が高くなつたと云ふよりも年々作家が妙なものにかぶれたりなんかして妙てこなものをかく様になつた爲めも有るでせう。ひん曲つた家などを故意にかくのが流行つて居りますが水繪にもあるんですか。あゝ云ふのは云はゞ一種の流行に過ぎないので永つゞきのするもんじや有りません。これから世の中もああ云ふ風潮が本流になつて行くかの如く説へる人もありますが、流行つてものは昔から何べんも繰返され來て居るのですそれは歴史が明らかに證明して居ます。たゞ私共が今丁度さう云ふ時代に遭遇して居るだけのものです。美術家が臆面もなくそんなものを模倣して喜んで居ると云ふ事それ自身が既に恥づべき事だと何故感じないのでうマ」

「どうも自分が水繪をかゝないので全く水繪の話は閉口します」

「範圍が狭いから種が盡易いんです。雑誌は初めからメリヤスの様に伸縮のきく様に作つて置くのが樂です。それは私は『みづゑ』を見る度に何時も感心して居ます、よく今日まで續いて發刊して來られたと。然かも大下君は

亡くなられて居ないし女の手一つでこれが貴君なくく出来る事じやないんです。坂井君がえらいと云つてもまだ男ですからね。え、執筆して下さる諸君や讀者諸君の御同情に據ると云ふのですか、それもさうでしょうが當事者の心勞は大變なものです、私にも其方面の經驗があるので人一倍お察しする事が出来るのです。それはさうと記者君はもう質問する事は有りませんか」

「は、文展の審査委員の中などにも水繪は油繪と比較すると著るしく貧弱だから、大きな面積のものに油繪にも劣らぬうんと努力したものを作らなければ駄目だと云ふ様な思想を持つて居る人があるが、若い後進者は何れの言を信じて好いかに迷ふと云ふのですか。若いからさもあるべき事です。先程からお話したでせう、そんな論は俗論中の俗論です。迷ふ事もなにもいりません無闇に面積の大きいものは無理です、水繪は何處までも水繪で油繪などとは異つて居ります。材料の長所を呑込んでその許す範囲内で仕事をしなければ何の効果も有りません。解りましたか」(在文責記者)

『みづゑ』四三 大正六年一月三日